

花と人の話

小川未明

青空文庫

真紅まっかなアネモネが、花屋はなやの店みせに並べならられてありました。同じ土おなつちから生まれ出たで、この花はなは、いわば兄きょうだい弟だいともいうようなものであります。そして、大空おおぞらからもれる春はるの日の光ひかりを受けていりましたが、いつまでもひとところに、いつしよにいられる身みの上うえではなかつたのです。

やがて、たがいにはなればなれになつて、別わかれてしまわなければならなかつた。そして、たがいの身みの上うえを知しることもなく、永えいいきゆう久くにふたたびあうことは、おそらくなかつたのであります。甲こうのアネモネの鉢はちは、赤あかい色いろの素焼すやきでした。乙おつのアネモネの植うわっている鉢はちも、やはり同じ色いろをしていました。丙へいのアネモネの

鉢はちは、黒くろい色の素焼すやきでありました。この三つの鉢はちは並ならんでいました。そして、あたりは静しずかであつて、ただ、遠とおい街まちの角かどを曲まがる荷車にぐるまのわだちの音おとが、夢ゆめのように流ながれて聞きこえてくるばかりであります。

このとき、甲こうのアネモネは、

「いまにも、だれかきて、私わたしたちを買かつていつてしまふかもしれない。なんと私わたしたちは、はかない運命うんめいでしょう。私わたしは、あくろい、広ひろい、圃はたけがなつかしい。昔むかし、みんなして、あはたけの圃なかの中に生うまれて顔かおを出だしたあじぶんの時分じぶんが、いちばん楽たのしかったと思おもいます。」
といいました。

「ほんとうに、あじぶんの時分じぶんが、いちばん楽たのしかったですね。風かぜは寒さむ

かつたけれど、朝晩、日の光は、弱く、悲しかったけれど、そ
 して夜には、霜が降つて、私たちを悩ましたけれど、やはり、あ
 の時分がいちばんよかつたように思います。」と、丙のアネモネ
 がいいました。

二つのアネモネの話を黙つて聞いていた、乙のアネモネは、顔
 を上げて、

「私たちは、どこへゆくでしょう。どうかかわいがつてくれる人
 の手に渡りたいものですね。おそらく、いつしよにはいられない
 でしょう。たとえば、もう二度と顔が見られなくても、おたがいに
 しあわせであればいいのです。けれど、みんなが同じようにしあ
 わせであることはできないでありましょう。」といいました。

そのうちに、人の足音がしました。三つのアネモネは黙つてしましました。なんとなくおそろしいような、また気づかわれるような気持ちでしたからです。それは、美しい令嬢たちでありました。ぜいたくなようすをしていました三人の令嬢は、店さきに立つて、そこにあるいろいろな花の上に、清らかなりこような瞳を移していました。

「あのリリーもいいことよ。」

ひとり一人の令嬢が、こういいますと、ほかの一人は、

「わたし、カーネーションが好きよ。」と、片すみにあつた淡紅色の花を目指していいました。

「アネモネにしましょうね、いま咲きかかったばかりなのですも

の。」と、三人の令嬢れいじようの中のいちばん年上としうえのが良かったです。すると、ほかの二人は妹たちふたりいもうとでありましょう。みんなその姉ねえさんのいうことに従したがいました。アネモネは、たがいに、心こころの中で、このやさしい令嬢れいじようたちの手てに渡わたることを願ねがっていました。どんなにやさしく取り扱とあつかわれ、またかわいがられるであろうと思おもつたからです。

令嬢れいじようの一人ひとりは、甲こうのアネモネを取とり上げました。

「どうぞ、これをくださいな。」といって、これを買かいました。甲こうのアネモネが持ち運もちはこび去さられるとき、あとの二つのアネモネは、「さようなら。さようなら。」と、見送みおくりながらいいました。そして甲こうのアネモネが、どこへゆき、どんな生せい活かつをしたか、二つ

のアネモネは、知りませんでした。ただ、甲のアネモネは、幸福に日を送るであろうと想像したのでした。

令嬢たちは、アネモネを家に持ち帰りました。それはりっぱな西洋館でありました。広い、日のよく当たる庭があつたけれど、そこにアネモネを置かず、ある一室の内に運んで、ピアノの置いてあるそばの台の上に、それを置きました。室内は明るく、いろいろに装飾がしてありましたけれど、日の光は、けつしてそこへは差し込まなかつたのです。このことは、花にとつて、このうえのない不幸でありました。

三人の令嬢たちは、今夜、このへやで音楽会を開く相談をしていました。そして、あたりを片づけたり、額を懸け換

えたり、いくつも腰掛こしかけを持ってきたりしました。あたりの片かたづ
 けがすむと、一人ひとりの令嬢れいじょうは、アネモネのそばへやつてきまし
 た、そして、つくづくと花はなをながめていましたが、やがて美うつくしい
 顔かおを花はなに近ちかづけました。花はなは、接吻せつぶんしてもらうことかと、うれ
 しそうにふるえていましたが、そうではなかつた。

「姉ねえさん、この花はなには、ちつとも香においがありませんのね？」

「そうよ、香かのあるのは、ヒヤシンスなのよ。」すると、妹いもは、
 テーブルの上うえにのせてあつた香こう水すいのびんをとりあげました。そ
 して惜おしげもなく、それをアネモネの花はなといわず、葉はといわず、
 頭あたまからふりかけました。花はなは、どんなにびつくりしたことではし
 う。

「姉ちゃん！ なにするのよ、花が枯れてしまつてよ。」と、ひとり人の令嬢がいました。

「だいじようぶよ、今晚だけは枯れはしないわ。」と、妹はいつて、三人の娘たちは、声をたてて笑いました。

アネモネの花は、その夜の華やかな有り様を見る勇氣もなかったのです。水ももらわなかったから、二、三日して枯れてしまいました。

甲の身の上を空想しながら、花屋の店頭にあつた一鉢のアネモネは、ある日、大学生が、前に立って、自分たちを見つめて居るのに気づきました。

「日あたりに出してやつて、一日に二度も水をやればいいですか

「？」と、だいがくせい大学生は、きいていました。なんというき気のつくがくせい学

生いだろうと、アネモネは思おもいました。
 「こんな人ひとが、私わたしをつれていったら、私わたしは、幸こう福ふくだろう。」と、
 アネモネは思おもったのです。

だいがくせい大学生は、乙おつのアネモネを買かってゆきました。

「さようなら。ご機嫌ごきげんよう。」と、後あとに、ただひとり残のこされた
 丙へいのアネモネはいつて、乙おつを見送みおくりました。

だいがくせい大学生のへやは、じつに乱雑らんざつで、書物しょもつや雑誌ざっしなどが、取と
 り散ちらされてありました。

それでもだいがくせい大学生は、アネモネを大だい事じそうに、机つくえの上うえにのせて
 おきました。

だいがくせい
大学生は、夜おそくまで、机の上に書物を開いて勉強
をしました。そして、朝は起きるのが遅かったのです。

アネモネは、午後の西日が障子の上进行を照らすのを見たばかり
で、自身は、日に照らされることはありませんでした。

花は、あの花屋の店先を、どんなに恋しく思ったでしょう。

下宿屋の女中は、花などには無関心でした。すこしの
考えもなくそうじなどをしましたから、赤いアネモネの花は、頭
からほこりを浴びさせられました。

大学生は、はじめの二、三日は、花に気をとられながら、な
がめたり、水をくれたりしましたが、その後は、忘れてしまった
ように、水もくれませんでしたから、土は湿り気がなくなつて、

花は枯れかかったのです。

ある朝、学生は、起きて、ふと花をながめました。

「元気がなくなつたな。」と、学生は、独り言をしました。

ちようどすこし前に、女中が朝飯のお湯を持ってきたの

のです。

学生は、乱暴にも、まだ冷えきらない、暖かなお湯を花に

かけながら、

「だいじようぶ枯れはしまい。水を取りにゆくのもめんどうだ。」

学生は、こういいました。

しかし、花はそのために、葉がしおれてしまいました。そして、

じきに枯れてしまったのです。

甲こうの身みの上うえ、乙おつの身みの上うえを思おもつて、最後さいごに残のこつた丙へいのアネモネは、しばらくさびしい日ひを送おくつていました。

ある日ひ、十二、三になつた男おとこの子こが、二人ふたり連れでやつてきました。

「これはなんという花はなだい。」

と、一人ひとりがいました。

「アネモネの花はなだよ。」

と、もう一人ひとりが答こたえました。

「きれいな花はなだね。」

「これを買かつていこうか。」

アネモネは、もしこの子供こどもらに買かつていかれたら、どんな乱らんぼ

暴のめにあうかもしれないと、びくびくしていました。

二人の子供は、このアネモネを買いました。そして、二人は、

さも大事そうにこのアネモネの鉢をかかえて、家へ帰りました。

子供らは、いろいろの花が植わっている庭へ持っていきました。

その庭は、たいそう日当たりがよかつた。ちようもくれば、みつ

ばちもやってきたのです。

子供は、毎朝起きると、すぐに花のところへやってきました。

そして土が乾くと、水をくれました。学校から帰つてくると、

花を日のあたるところへ出して、また、そこがかげると、ほかの

場所へ移してくれました。

花は、二人の子供にかわいがられました。

花も、子供がやさしいので、すっかり子供が好きになつてしまいました。

そして、長い間その庭で咲いていました。

が、時節がきた時分に、だんだん花は終わりに近づいて衰えてゆきました。

「この根をしまつておいて、また来年の春になったら植えて咲かそうね。」

と、二人の子供はいいました。

花は、どんなに、これを聞いてうれしかったでしょう。来年の春も、また、そのつぎの年の春も咲いて、子供と仲よくしようと思ひました。

花^{はな}が終^おわったとき、子^こ供^{ども}らは、その根^ねを乾^ほしてから、これ^{これ}を袋^{ふくろ}の中^{なか}へ入^いれて、その上^{うえ}に「アネモネ」と書^かいて、しまっておきま
した。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「少女の花」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「花《はな》と人《ひと》の話《はなし》」
となっております。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花と人の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>